
WANTED

綾師邦助

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

WANTED

【Nコード】

N7191M

【作者名】

綾師邦助

【あらすじ】

普通の大学生、千葉啓太は、殺人犯と間違えられ逃げまくる！！

悲惨な叫び

「・・・俺じゃない・・・俺じゃないんだ・・・」

「待て！！千葉！！！！」

「俺じゃない・・・犯人は・・・犯人はあああああ！！！！！！」

バツ

チハケイタ
千葉啓太は恐ろしい、何十人、いや何百人にももの警官に追いかけられた夢を見た。

「・・・夢か。」

ベットから起き上がり、時計を見た。
午前10時27分。

「・・・寝過ぎたな。」

顔を洗いに行く為に、洗面所に行った。すると・・・

そこには女の死体があった。

「・・・え？皆子？」

そこには、友人、スガワラシヨウウ菅原翔吾の彼女

ヤマウチミナコ
山内皆子の死体があった。

ピンポーン

だれか、来た！

「・・・見つかる・・・俺が・・・警察に・・・」

自然に啓太は、窓から外へ出た。

・・・

何分くらい走っただろうか、もしかすれば、1時間以上走ったかもしれない。

しかし時計を見ると

「10時40分・・・」

全然、時は進んでなかった。

「・・・とりあえず逃げるか。」

また足が動きだす。もう二度と、あそこには戻れない。

少し賑やかな商店街に着いた。11時過ぎということもあり、人はいっぱいいた。

「……まだ、バレてないよな……」

少しずつ歩みを進めると、電気屋に人が集まっていた。

「え……？西浦町？隣よね……怖いわぁ……」

そのおばさんの声に啓太は背筋が凍った。

まさかとは思いつ、テレビをのぞいた。

「神奈川県相模原市西浦町で、殺人事件が起きました。場所は、ここアパート西浦の、千葉宅で殺人事件が起きました。」

「……間違いなく……俺の家だ……」

そのテレビを見た瞬間、俺は自然に足が動いた。

「ここらへんに・・・警察がいるかもしれない・・・」

そうすると、肩を叩かれた。

「すみません、千葉・・・啓太さんですね。」

振り返ると、自転車に乗った、警察官がいた。

俺はとっさに振りきった。

「あっ！ちょっと待て！！！」

俺は咄嗟にスーパーの駐車場からママチャリを奪い、逃走した。

「・・・・・・・・俺じゃない・・・」

その悲惨な叫びは誰も聞こえなかった

仲間、そして北海道へ

……ママチャリをこいで早1時間

「……警察はいないな……なんで……俺が……」

夢中でこいでいたため、ここがどこか分からなくなった。

「じじは……どこだ……」

汗だらけのTシャツ、炎天下の日差しが突き刺さる。

「とりあえず……涼もう……」

そして、近くの喫茶店に立ち寄った。

俺が千葉啓太という事がバレないように、一番奥の席に座る。

しかし……

後から来た、若い20代くらいの女性が来た。

「……千葉啓太ね。」

「まさか・・・お前覆面警官か？」

「いいえ、私の名は中村麻耶ナカムラマヤ、実を言つとね・・・強盗犯つてやつ

「・・・は？」

啓太は信じれなかった。

「そういつて上手く乗せて、警察に連れてく気だろ？」

「そんな気無いわ。だって私だってやつと脱獄できたんだもの。」

「・・・戻つたつて意味はない...という事が、で、どうしたいんだ？」

「私も相模原拘置所から逃げてきたの、だから、千葉も私も同時に探してる・・・って訳」

「俺は・・・殺してはいない・・・」

「まあ、いいわ、ちょっと、私、神奈川から逃げたいの。」

「逃げりゃ・・・ってまさか！俺も連れつててくれるのか？」

「そうよ。盗んだ金はどこにあるかと警察に聞かれても黙秘し続けたおかげで金はいっぱいあるし」

「ありがたい・・・、でどこに逃げるんだ？」

「……おまかせする。」

意外な反応。

「……じゃあ、北海道は？」

「おっ、夏だからね、いいところ選んだね。」

「フン。」

そうすると、中村と啓太はすぐさま、喫茶店を出た。

バスに乗り、空港へ来た。

「……さあ行くわよ。」

札幌に行く飛行機に乗り、おれたちは逃げた。

「千葉、あなた殺してないって言ったよね？」

中村が突然問いかけてきた。

「ああ、朝起きたら、俺の部屋に死体があったんだ、その時人が来たから、俺は逃げた。」

「フーン」

その一言でまた二人の会話は途絶えた。

・・・

いつの間にか寝ていた。ママチャリでこいで逃げた疲労もあってか、グッスリと寝ていた。

「・・・着いたか？」

「ええ、もうすぐね。」

・・・

「着陸したようね。」

あまり飛行機内では喋らなかつた。

「・・・そうだな。」

そして今度は北海道への逃走が始まる。

7
月
1
日
1
5
:
2
4

二人の啓太

「今日から、ここ、ヌノホタ布保田交番で働く事となりました、ニシノケイタ西野啓太です！」

「ここ、布保田の平和、いや、北海道の平和を守る為に、精一杯・・・」

「いいよ、いいよ、そんながんばらなくて、いつだって布保田は平和、平和。」

突然出てきた、若い男

「でも、警官として・・・」

「あのなあ、新米、ここに交番が出来て、早2年、できてから起きた事件、たった8回だぞ！
去年なんか、2件しかなかったんだぞ！」

「・・・でも、俺は、昔、布保田出身の警察の人に助けもらったことがあって・・・」

俺は、なぜか悲しくなってきた。

「でも事件無いほう平和でいいじゃん！あつ、俺の名前は、ヤマザキレイ山崎怜
ザキヤマ先輩とかで呼んでくれ」

そうすると、他の警察官が声をあげて驚いた。

「おい、お前ら！ニュース見る！」

やけに急いで話す

「今日、午前発生した、殺人事件ですが、全国指名手配となった千葉啓太が、北海道布保田村で目撃されたという情報が入りました。」

俺は底から歓喜がわいた。

「・・・おい、新米行くぞ、千葉啓太を・・・捕まえに行くぞ！」

「はい！！」

逃げ切れぬ者

「……ここが北海道か、涼しいな」

啓太は一息つく。

「落ち着いてる暇は無いわ、あなたは全国指名手配されてるのよ」

そこに、中村がツッコむ。

「……まあ、どこにいても立場は同じ……か。そういや、ここは北海道のどこなんだ？」

「ここは、北海道布保田村。危険がまったく無い、豊かな村よ。」

「そうか。」

そうすると、警官が二人近づいてくる。

「やっべえ……逃げるぞ！麻耶！」

途端に足が動く

「・・・ザキヤマ先輩！あいつが千葉啓太じゃないですか？」

「・・・そうだ！ん・・・？もう一人は・・・中村麻耶！行くぞ！」

二人は走り出した。

タッタッタッタッタッタ

かなり走った。いくら北海道といえど、夏だ。暑い。

気づくと、もう一人の姿がいなくなっていた。

「・・・麻耶？おい！中村麻耶！どこだ！」

遙か遠くを見ると、中村麻耶があな警察官に抑えられていた

俺は自然に、あいつの元へ駆け寄った。

「おい！麻耶！」

「・・・千葉・・・、私はここでダメみたい。この1000万を持つ

「て逃げて。」

麻耶の手から投げられる札束。

「ダメだ！一緒に逃げるぞ！」

麻耶の目から涙がこぼれる。

「・・・超短い間だったけど・・・久し振りに人としやべれて・・・
楽しかったよ、千葉」

そうすると、麻耶の手に手錠が掛けられた。

ガチャッ

山崎怜は言う

「...次はお前の番だ！千葉！！」

追いかけてくる、俺は受け取った100万円を片手に足がちぎれそうになるほど走った。

・・・振り向くと・・・誰もいない・・・

「・・・逃げきった。」

そこで、札束の中に紛れ込んだ、1枚の手紙を見た。

「千葉啓太へ、この手紙を読んでもという事は、私はもう捕まった。ということでしょう。」

私は、小さい頃、両親を失くし、引き取られた親族の家ではいじめられて、もう心がボロボロで、

いつも同じ服を着せられ、風呂にも入らせてもらえず、学校では臭いといじめられ。

そしてついには、暴力も震われ、それでなんとか頑張って生きてきて、思いついたのが、

銀行強盗でした。これで全国の人に私の痛みを知ってもらおうと思いましたが、

それで、実行し、捕まりはしましたが、スッキリした気分になりました。

それで、拘置所の中でふと思ったんですが、ここから出れば、私は自由になれるんだ。と思い、

警官の眼を盗み、脱獄してきました。そして、出会ったのはあなたでした。

・・・最後に、一言・・・逃げきって真相を暴いてください！あなたがやってないことは・・・

目を見れば分かります。それでは・・・さようなら。 中村麻耶「

・・・こんな事実があつたなんて。

「・・・ありがとう・・・麻耶、、、行くぞ。俺は・・・」

また俺は走り出した。

7月1日 18:40

食い意地

「待ちなさい！！料金払いなさい！！！！」

「やーだねー！！！！」

この食い逃げしている男。名は、小玉諒太。

「待て！！小玉！！！！」

警官も追いかけてくる。

「くっそ！！しつこい奴だ！！！！」

角を曲がる。そうすると、一人の男がいた

「あぶねっ！！！！」

ドーーーーーン！！二人はぶつかった。

「小玉確保！！！！」

「お前のせいで捕まったぞー！どうしてくれんだ！」

小玉は、もう一人の男に言った。

「いや・・・」

警察が、お礼を言う。

「ありがとうございます！こいつ食逃げ犯なんです・・・」
言葉の途中で急に止まる。

「お前は・・・千葉啓太！！」

俺は、また走り出した

「え！？千葉？」

小玉も驚く。

「待てー！！千葉ー！！」

警官が追いかけてくる。

「・・・千葉のおかげで、逃げれる！オッホッホッホー！！！」

小玉はその場から逃げだした。

「くっそー！！やけにあの警官、足早いな・・・」

「待て！！千葉！！！」

バン！！！！

ついに警官は銃を撃ってきた。当たりはしなかったが

「うわ・・・やべえ！！！」

千葉はさらに早く走る。

警官の足が止まる。

「・・・ハアハア・・・逃げきった!!」

麻耶からもらった、100万円を握りしめている。

「一回、あのレストランで・・・休むか・・・」

目にとまったファミレスに立ち寄る。

いらっしやいませー。

小玉諒太はまたもや、食事をしていた。

「さっきの食逃げ犯!また食い逃げしてんのか?」

「うるせー!殺人鬼!・・・でもありがとな!警察から逃がしてくれて!」

「・・・相席いいか?」

「おお、いいぞ。その代わり・・・金貸して!」

図々しい奴だ・・・心の中で思いつぶやいた。

「・・・おい、千葉、なんで人殺したんだ？」

「・・・殺してねえ！！俺じゃないんだ！！」

俺はマジになる。

「逃げるから、お前が犯人だと思われるんだよ。」

「なあ。。。小玉」

「ああ？」

「一人で逃げるのは心細いっていうか・・・」

「・・・お前について来いと？」

「ああ。」

そうすると小玉は・・・

「いいよ！その代わりに、このステーキおごって。」

よだれを垂らしながら喋る。

あっけなく仲間になってくれた。こんな奴と一緒にいいのか？と思いつつ。

「分かった。」

「じゃ、決まりだな！」

7月1日 20:22

父の仲間

・・・忙しい一日から、早くも、1日が過ぎた。

7月2日。 8:12

「・・・千葉!起きろ!」

小玉の太い声で目が覚めた。

「のんきに寝てんな、自分は逃げてるってこと自覚しろよ」

「うるせえな。」

遠くに子供の声がある。その声がだんだん近くなってきた。

「パパ!」

そうすると小玉がその子供を抱き上げた

「お!?!優太^{ユウタ}!ママは?」

その言葉にビックリした。

「は？お前子持ち？」

「そつだよ。結婚してるし。」

小玉は普通の顔で言う。

その子供が

「ママは後ろにいるよー！」

そこには女の姿があった。

「……始めまして。主人がお世話になってます。妻の優華ユウカです。」

かなりの美人だ。

「あつ、ども……。千葉け……。あつと……。今野樹希コンノイツキです。」

俺は、千葉という事をバレないように、今野樹希という偽名を使った。

「今日も遅くなるの？」

優華は暗い顔をしていう。

「ああ、ごめんな。」

「・・・じゃあね、優太を保育園に送らなきゃいけないから。」

「じゃあね！パパ！」

「おお！」

・・・

「お前子持ちかよ！早く言えよ！」

「というか、今野樹希ってなんだよ！偽名かよ！」

「千葉啓太ってバレたらヤバイだろ！」

そうすると、西野がいた。

「見つけたぞ・・・！」

「くっそ！逃げるぞー！！」
タッタッタッタッタッタッタッタ

「くそっ！くそっ！」

小玉は遅れてきた。

「おい小玉！一緒逃げるぞー！」

「もうダメだ・・・」

「そんな弱気になってどうする！ホラ、来たぞー！」

「・・・俺が、あいつらを抑えてる。千葉は行け！」

「おい！」

そうすると小玉は逆走した。

「おい！待てよー！おいー！」

問いかけに答えない。

「なんだ、お前！」

「俺は……ステーキをおごってもらったんだあああああああああああ……」

ボディプレスで西野をつぶした。

「ぐはっ！何をする！」

「逃げる！千葉！今のうち！」

「ダメだよ！お前子持ちだろ！？一緒に逃げんだよ！」

「昔からスタミナが無く、テニス部では、いつもランニングは遅れていた。」

「だから、おれはパワーでお前の役に立つ！」

「役に立ってないよ！一緒に逃げなきゃ立たないよ！」

「いいから逃げる！」

血眼の小玉を見て、怯んだ。

「離せ……離せえ……」

山崎が必死にもがいてきた。

「逃げる!! 逃げる!! 千葉!!」

「……ありがとう……小玉!!」

俺はそこから猛ダッシュした。

……警官の姿はない。そして……小玉の姿もない。

そうすると、ある保育園の前に居た。

「あっ! パパと一緒にいた。お兄さんだ! 父さんは、今何している

「？」

あいつの子供。

「……あいつは……飯を食ってるよ……」

「もう食べ過ぎなんだから！じゃあね！お兄さん！」

……

「俺のせいで……俺が仲間になってくれと言ったせいで……」

涙が溢れる。止め処なく……

7月2日 10:57

休日

「あつ、やべっ！7時だ！出勤しなきゃ……って今日は、休みとっただった。」

山崎怜は呟いた。

「あぁ〜彼女欲しいなぁ〜、てか結婚してーな」

怜は、もう32歳。結婚……なんて、考えてもいなかった。

しかし、

「好きな人は……いるんだけどな。フフツ」

32で、久し振りの恋をした。

「……今日は天気もいいし、散歩に行くか。」

日向が暖かい……というより暑い。

「今日はあちーなあ。。。」

周りを見ると、誰もいない。叫びたくなった。

「三鷹上ミタカジョウだな？」

「フン・・・おっさん、今日、学校の練習ないんだ、俺ん家の、コート使って

テニスしない？」

上は言っ。

「OK、俺は強いぞ、俺も・・・全国優勝経験者だからな。」

「ほお・・・いい試合をしようね。」

「千葉啓太。よくこの糞な小説に付き合ってくれた。」

「な……なんだって!?!」

「ちなみに、おれの本名は、タカクロハナゲ高桑鼻毛という。」

な……

「じゃ「B」はなんのことだ!?!」

「 Donald です。」

Donald もオナるのー? アイムラブニット

「……………は？」

「菅原翔吾よ。今よみがえれ!!!」

ぎゃしいしいしいしいしいん

マジンガーZ!!!!!!

「な……………なにが起きた。」

「中野梓……………という物を知っているか？」

「し……………知っている。けいおん!!!のサイドギターの子だろう!」
「？」

ギヤシヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア

その瞬間・・・

ベンケルベンケル

最終回（後書き）

ありがとうございました。

ここまでこれたのは支えてくれた皆様のおかげです。

ここに誓おう。

秋山澪は俺の嫁 と

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7191m/>

WANTED

2011年1月23日23時09分発行